

| | |
|------------|---|
| 教員名 | 村田 眞弓 (MURATA Mayumi) |
| 所 属 | 文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座 |
| 学 位 | 文学修士 (1979 東京大学) |
| 職 名 | 助教授 |
| URL/E-mail | http://www.li.ocha.ac.jp/index.html/muratama@cc.ocha.ac.jp |

◆研究キーワード

フランス17世紀宗教思潮 / 神秘主義 / 古典主義

◆研究内容

フェヌロンの『テレマックの冒険』をめぐる近年新たな読解の試みがいくつかなされている。かつてこの作品が彼の神秘主義思想の表明であることを、作品中の「父」概念の分析を通じて論証し、日本フランス語フランス文学会で発表したことがある。今回新しい研究を参照しながら改めてより広範な文脈に位置づけつつ『テレマックの冒険』を読み直し、その結果を私的研究会において発表した。発表と質疑を通じ、ホメロスの『オデュッセイア』補遺という形を借りながらキリスト教神秘主義思想に裏打ちされた帝王学を未来のフランス王と目されていた少年に説くこの冒険譚が、「脱構築」の観点からの読解により、より多くを語る可能性を持つ作品であることが明らかとなった。又発表の機会にテキストの何方所かを丁寧に翻訳する作業を行い、古典的フランス語が持つ端正かつ流麗な美しさを改めて確認し味わうことができた。

◆教育内容

【学部】17世紀フランスの文学作品の講読を通じて「近代」について考えるきっかけを与えると同時に、古典的フランス語読解のすべを学ぶという基本的方針の下、2005年度はモリエールの『ドン・ジュアン』を取り上げた。ドン・ジュアンが近代的自由思想の体現者であるかを、テキストを分析しながら個々の学生に考えさせた。後半は『ドン・ジュアン』にも言及している当時の演劇批判を精読しながら、時代背景への理解を深めた。

【大学院】神秘家の言説をテーマに、前半はサン＝マルタンの『渴望する人』の一部を精読し、後半は17世紀フランス女性神秘家の自伝を読みながら、神秘体験の「語り」が成立する場について考えた。神秘家の言説は、特に今回取り上げた自伝といった言説の場合、語られる内容のみならず、自己を神秘体験の場として規定しつつ行われる「語ること」そのものが、何よりも彼らのメッセージとなっていることを確認した。

◆将来の研究計画・研究の展望

フェヌロンは結果として、ポール・アザールが「ヨーロッパ精神の危機」と名付けた時代を象徴する「新旧論争」「開かれた宇宙」等と深く関わり、発言をした。彼の思想の本質をその神秘主義思想をも含めより多元的観点から理解することにより、〈科学者の近代＝「進歩」〉とは別の位相から見た〈文学者の近代〉を浮き彫りにしていけるのではないか。まずは彼のコスモロジーを『神の存在証明』を中心に整理しようと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・神秘家の言説(discours)：神秘体験をどう語るか
- ・神秘家の言説(discours)：自己を語る語り（神秘家の自伝）

◆受験生等へのメッセージ

17世紀フランスに関心を持つ学生はそう多くはない。確かに遠い昔の事柄であり、「今」の関心と重なる部分は少なく、「現在」の問題意識に対する即効性に乏しい。だが本当にそうだろうか。科学も学問も進歩し続けるという考えの欺瞞性が暴かれて久しいが、まだどこかでこの神話を信じたがっている自分に気付くとき、また理路整然と論述できることが絶対の価値であると教えられ、論理的整合性の枠をはめることのできない事象を切り捨てたくなったとき、そうした考え自体が実は「近代」の申し子であることに改めて思いをはせるべきだと思う。そして現在我々が直面している問題の多くがそうした「近代」に根ざすものである以上、いったい「近代」とは何なのか、何であったのかを今一度自分自身で考えてみるべきではないだろうか。この「近代」が17世紀ヨーロッパのあたりから始まること、デカルトを生んだフランスにその一つの典型があることを考えるなら、17世紀フランス研究が取り組み甲斐のあるテーマであることは明白だ。